中島敦『名人伝』の構造

新井通郎

中島敦『名人伝』は、一九四二（昭和十七）年二月一日発行された『文庫』第二巻第十二号（三笠書房）に掲載された作品である。中島が、一九四二年二月四日に喘息の発作による心臓衰弱により死去していることから、『名人伝』は生前最後の発表作である。

先行研究における『名人伝』の評価はわかっぱ、解釈も分裂しており、作品の構造を明確にすべき、検証すべき作品といえる。その中で、『列子』の逸話を素材として作られたことは佐々木充氏の論稿によると、周知のこととなっている。しかし、それでも、中島と『列子』の関係を検証し、作品の意図を究明するものである。
中島敦と『列子』との関係を明確にするためには、漢学と密接な関わりを持った者が多くいる。父田人は漢文科の教師、祖父慶太郎は亀田鵬斎の端蔵も漢学者として世に立っている。中島は、このような環境下で漢学に対して影響を受けている。

昭和八年（一九三三）三月

帝大卒業後、即職教於私立横濱高等女学校。以来、在執教之余、鑑研英文学及中國文學。（英文学方面、研究何物、不詳）

中國文學方面、尤愛左傳、莊子、列子、及列子。詩方面、則傾倒於王摩訶及高駢。

中島が、高等女学校で教授をとるながら、『莊子』や『列子』といった道家文学への興味を示していたことがわかる。年譜において挙げられている作品は、『左傳』と『庄子』の素材として、作品化しようとする跡が見える。つまり、中島の中で『列子』を考案していく上で、中島がどのような著書に影響を受けているのかがわかる。年譜には、『列子』の素材として、『庄子』や『列子』を考案していることが認められる。中島は、『列子』を『新書』に沿って考案している。
『名人伝』は、『国字解』所収の『列子』と『四部叢刊』所収の『沖虚至德贄經』の二冊のみである。中島は生前、書物の売却を頻繁に行っていたことから、他の諸本の『列子』を所有していた可能性もある。また、中島自身が購入したかどうか、中島が一時所有または借用により、それらの『列子』を読んだ可能性は無視できないが、確証を得ることはできない。『四部叢刊』の所収の『沖虚至德贄経』中島家において『列子』を購入したもののであり、中島が書物に書き入れたかどうかを特定することはできない。中島家家において『列子』の大観があり、それに連なる『列子』も所収されてはいるが、中島家において『列子』を中心に中島が購入したもののであり、田村家に使用した書物と見える。commito-index-

『名人伝』の構造を論論するにあたり、作品の構成を正確に示しておく。一冊に示された段をもとに、一つに

－100－
第一章
二段
について考察する。

『名人伝』の第一段第二段において、『列子』等における事実を検討している事は、佐々木氏の論稿で詳解されている。中島は、素射としてもの『列子』をどのように組み立て変化させることである。名射の冒頭部分は次のようにある。

趙の邸宅に住む紀昌といふ男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。

冒頭部分において、なぜ、紀昌が『列子』を現代人向けに伝わっていた飛射の力がこの一文によりわかる。すっきりとした人物描写により、実直なままに弓の名人目指す紀昌の姿は、名射飛射の弓術の実力を明確に示すことにつながったといえる。

『列子』西方第五における第一段第二段の素射となっている部分は、次のようにはじまる。『國字解』によると、甘虻（甘長）善射者、彀弓而戰伏鳥下、甘虻は弓の上手ゆえ弓をひき矢をはなたぬけれども鳥獸がにげ隠れずいらるを待て、注に無虚發とはあ

d矢のないこと、はなつ程ではあだ矢はなければならないもいかる。物がにげぬ、戦国策を引く発はすすきのことや、矢をはげずすびきしたばかりでどぶ鳥がおる、

弟子名飛射、學射の甘長を巧かに師沙特。
飛衛と云うのも甘蠻が弟子となりて師匠より上手となる。紀昌者又博士於飛衛。列子、湯問第五では、甘蠻師師、飛衛、紀昌の子孫関係についててからはじまる。『名人伝』の冒頭における『天下第一の弓の名人』を志す紀昌像は、列子、湯問第五においては示されていない。『名人伝』は、列子、湯問第五の註を活かし、黄帝第二の適当と複合させた構造で描かれている。列子を素材に人物設定した後の紀昌と飛衛の弓術訓練の描写は、列子、湯問第五の逸話と一致している。人間設定を明確に示し、『天下第一の弓の名人』にならなければならない。ここまでは、列子、湯問第五に則した部分である。これおいて、飛衛は、『危機を脱し得た安堵と己が従事に就いての満足』を得ているとともに、次のような行動をとっている。涙にくれて相対しながらも、再び弟子が数える間も抱くようなことがあっては甚だ危いと思った飛衛は、紀昌に新たな目標を与えみて気を転じるに如かないと考えた。彼は此の危険な弟子に向って言った。最早、伝ふべき程
ことは悉く伝へた。僕がもし以上の斯の道の詛奥を極めたと望むならば、ゆいて西の方太行の壁に挙し、霍山の頂を極める。そこには甘蠅と共に古を暖し、うるる斯の道の大家がをられる。各の師 tàと師 tàに倫する。師 tàと師 tàは、今は甘蠅の外にあるまい。一方、画策を遂げられなかった後の 「列子」 湯間第一の弓の名人」 を指す強い向上心をもった両者の性格を差示されていない。素材をいかしながら進まれて 一、賢愚の証と、名は、遠いの志を強さゆえにえた間を通し、飛衡ののもとから新たな場所への展開を白起している場面である。

四

第三段は、飛衡が危険な弟子を回避したことにより、紀昌が甘蠅師 tàのものを見ぬところからはじまる。換言すれば、
紀昌と甘蠅師とのやりとりの描写により、展開していくことになる。飛衛の「我々の射の如きは殆ど見事に類する」という言葉を、紀昌がひきずっていることは、其の人の前に出ても我々の枝の如き見事に類するということを再認識させる意味も含まれている。

では、第三段で登場する甘蠅師とはどのような人物であろうか。次のようにある。

飛衛が紀昌を指した彼の望む、馬の大師を目標とする彼の勇気と、それを探求する彼の自己認識が再認識される意味をもっている。

『名人伝』の素材として先に述べた『列子』『湯問第五』では、甘蠅師と飛衛師弟関係であることをのみ示されている。

第三段では、おおむね『列子』黄帝第二を素材にした部分である。『名人伝』第一段第三段の素材として『列子』『湯問第五』
註を手がかりに、「不射之射」を連想することは、容易だったといえる。素材となった《列子》黄帝第二は、次のようにある。

伯昏無人列子の弟子。射の師。不射之射、非不射之射で、弓の射を心得た伯昏無人を甘蠟老説に置き換え、人物設定をしている。これで、弓術の名を目標とする弓術の領域から射術の領域を極めることが可能となる。つまり、弓という道具が必要とする世界から、射という行為だけを必要とする世界へと移行している。

『名人伝』において、甘蠟老説は、銅とした態度をとる。そして、甘蠟老説は、師から百歩ばかり離れれた絶壁の上に止まった。その断崖から半ば宙に浮かす危険の上に立つと老人は駄目し、振返って紀昌に言ぶ。

客観的にみてても、おびえるようなところを飛行機のような刃は見えない。この時点でにおける紀昌と甘蠟老説との差が歴然として描かれている。紀昌は、第一段で題に近づく。
名人的伝説では、紀昌が弓の名人を志したとしてもかくらず、弓術の域では弓手であり、射術の域まで極めることがあろう。弓と射の断面において、天下第一の弓の名人を志すとしているので、第一段第二段における弓術を極めた者を『名人伝』における場面が付加されている。

列子
黄帝第二には、甘蟻師が射術を極めた場面はなく、甘蟻師の射術の極みを紀昌が目の当たる場面が付加されている。

列子
黄帝第二には、弓を抜いたりする場面が付加されている。

列子
黄帝第二には、弓を抜いたりする場面が付加されている。

列子
黄帝第二には、弓を抜いたりする場面が付加されている。

列子
黄帝第二には、弓を抜いたりする場面が付加されている。

列子
黄帝第二には、弓を抜いたりする場面が付加されている。
甘蠅老師の描写は、『名人伝』における紀昌が名人を志していくというストーリーの展開の中に、甘蠅老師の実像を通
し、一つの名人像を提示している。このストーリーの展開において、弓術から射術へと当初の志からズレを生じさせ、紀
昌にとって射術の域が『名人』となったのが第三段である。

第四段における発起は、紀昌が甘蠅老師の許から戻ってくる場面からはじまる。
九月の間、紀昌はこの老名人的許に留まった。その後の間、如何なる修業を積んだものはやらそれば誰にも判らぬ。
甘蠅老師の射術を見た紀昌は悶然として、甘蠅老師の許に残ったことは、明白である。しかし、紀昌は甘蠅老師のもとから、戻ってきたのだろうか。
『列子』天瑞第一に次のようにある。

黄帝日、精神入其門、骨骸反其根、我尚何存、

萬物の生ずるそれぞれの形をなすことや、形あれば神明もそなはる、それが離散すれば精神は出たる廃の門に入り、
骨肉は本根の地に反たれば一物もこのみと、まらぬ、黄帝を引て証にしたものや、

『名人伝』において、奥深し山の中にある甘蠅老師の許を（天）とし、戻ってきた邸舎の都を（地）と置きかえてみること

— 107 —
ができるのではないか。第三番における甘蟻老師を「神人」のような人物と捉え、その者の行為の行われた場所を一観

のような場所が仮定することにより、紀昌の精神のみが甘蟻老師の許に留まり、木偶の如く変わった風貌のみが都に戻って、

ことを重ねることでできると考える。そして、以降を肉体と精神の束縛で進められていくと考えることができるのである。

では、甘蟻老師の許から戻ってきた紀昌の顔付を具体的に見てみたい。「以前の負けず嫌いな精悍な面相は食事なくなり、

をひそめ、何の表情も無い、木偶の如く愚者のように容貌に変わっている。」ってある。これが飛衛は、紀昌の容貌を

を初めして天下の名人だ。」と評している。飛衛は評価を、紀昌の容貌を見てのみで判断している。「木偶」と「列子」との

の風貌が「列子」との拘わりがあるといえることから、飛衛をはじめ、顔付の変わった紀昌を名人としている人々に

と、「列子」が受容されており、一般的になっていると

の言葉の素材としては、「列子」において、黄帝第二、説符第八に見えることができる。また、黄帝第一は次のようにある。

故曰、至言去言。至為無為。齊智之所知則淺矣。

なつけんともとらえても思いはぬ處である。故に至極の詞と云は云の在が云にまき、するの至極と云

はせぬである。悉くしるる知の知の知を切れて浅し、丈の蝉をさすは形をつなごうを得る。海童は無心にして、鳥を取る、
情は、木偶の如き紀昌を見て名人と評していることと同様、『列子』の思想が、一般的なものとなっている裏付けとなる部

紀昌の実像を見ないまま、人々に名人としての様々な噂が伝わる。第四段における文脈について、大野正博氏は、「唐突な話法の転換がある」とし、「第三段までの直叙述の明快さは、第四段で得体も知れぬ噂話——伝聞の話法に一変する」と指摘している。この指摘のように、伝聞話法が、実像のわからない紀昌を名人であると作り上げている。この構造は、中

弓を射ることのなくなりたった紀昌の姿は、『列子』黄帝第二の表現を素材としている。『名人伝』において、晩年の紀昌のことを「老名人」と称している。廃廃の人々は、紀昌の名人としての実像がわからないのに拘わらず、「老名人」としている。このことは、『列子』の思想における、同等に「老名人」と使っている。作品中で異なった実像を織り交ぜた人物として、『神人』のような人物と無為に化した人物のどちらもすぐれた人物としている。神人の人物の不明确性に対して、イロニ

紀昌は、甘蠧師の許から戻ってから四十年後に亡くなった。その間、紀昌の発した言葉の通り、射を口にするこ
像の見えない名人を、名人として描き出されていないことを告白しているのである。なお、寓話作者にとっては、実際の記録にのらない、実在の人物を読者は想像することができる。たとえば、甘摩老師のような人物を読者として提示しているからこそ、第四段のにおいても少しでも有名の人物を読者として提示しているのである。

妙な話は、紀昌の死ぬ一、二年前のこととして伝わっている。紀昌が知人の許に行った時に、弓を忘れてしまったとか。

「ああ、夫子が、古今無双の射の名人たる子が、弓を忘れ果てられたとや。ああ、弓という名もその使い途を忘れていたなど。そののち当分の間、邸宅の都では、画家は絵筆を隠し、楽人は絵の絵を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じたといふことである。」

木偶の如き紀昌は、射ることができないので、弓を忘れてしまったと伝わっている。妙な話として伝わった出来事を通して、最終場面において、甘摩老師の許から戻ってきた紀昌の実像を垣間見せている。伝わっている話としても、最後の場面で提示しているのでは、事実かどうかを確認を得ることはできないが、肉体と精神の偏しした紀昌の実態として、見たことのないと考えられる。『列子』にみられる素材にした可能性は大きいにあろう。
佐々木元『名人伝』『幻の現実』『前出』では、「人間の世界」の意識を通じて貫流する、自身を破れ、破れていかすようなものと解釈される。本村一信『名入伝、続作』『成也志・志のゆくえ』『中島文庫』など、創作の成就を酡美した人間性が、むしろ濃い、西洋的な教養を身に付けた人であるが、中島の小説の多くの作品は、漢籍から題材を探ったものである。佐々木元『名人伝』『前出』では、「志を立てた男の、明確にみられる実体のない、不感、虚無感を訴える」としている。作品であると校長田沼志之子の写真と短歌が印刷されたものが、この中に含まれている。とある。

『日本大学法学部所蔵』『中島文庫目録』『中島文庫目録』（日本大学法律学部図書館）『九十八年一月』では、『国字解』の発行を明治四年と

『中島文庫目録』『中島文庫目録』（日本大学法律学部図書館）『九十八年一月』では、『国字解』の発行を明治四年と
佐々木充『名人伝』『幻の現実』（前出）
德田進『中島敦の人』（中島敦文庫目録）（前出）
山敷和男『中島敦の名人伝』（世界／潮井基次郎／中島敦／日本文学研究資料叢書／有朋堂出版／九七八年二月）
坂本哲三編『老子・荘子・列子』（有朋堂書店／大正二・一年）に収められた『列子』のことを指す。德田進「中島敦の人」にみる古代説話の受容と発展に論じた東京大学法学部所蔵『中島敦文庫目録』の『列子』も参照される。
以降、『列子』本文の脈絡は、『先哲遺書漢籍通考事』第三巻（早稲田大学出版局／九二一年十月）から行う。
『列子』は昔の学者が仮に仙人のような表相で甘噛師の人物像を作り上げたと考えるが、本書の脈絡を示すと誤解を招く。甘噛師の素顔は仙人の実像であるが、仙人の実像描写は、列子において
『列子』においては、ルドネスの表現として表されることがあります。
《黃帝內經》「何以問之」所載之「人」及「人」所指之「人」。其中「人」及「人」所指之「人」。其中「人」及「人」所指之「人」。其中「人」及「人」所指之「人」。其中「人」及「人」所指之「人」。其中「人」及「人」所指之「人」。其中「人」及「人」所指之「人」。